

氏名	花坂 哲				
学位の種類	博士（文学）				
学位記番号	博 乙 第 2923 号				
学位授与年月日	令和元年5月31日				
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	古代エジプト王朝時代の皮革技術の研究 —アコリス遺跡出土資料を基にした総合的考察—				
主査	筑波大学	教授	Ph.D.	三宅 裕	
副査	筑波大学	教授	博士（文学）	常木 晃	
副査	筑波大学	教授	Ph.D.	山田重郎	
副査	早稲田大学	教授		近藤二郎	

論文の要旨

本論文は、古代エジプト王朝時代における皮革利用について、著者自らが調査に携わってきた、アコリス遺跡出土資料の分析を核として、関連する考古学的資料、文字資料、図像資料、さらには現代アフリカの民族事例の検討も織り交ぜながら、総合的に論じるものである。主に、古代エジプト王朝時代における製革工程の詳細、製革工房の具体的な様相、皮革製履物の時代的変遷の解明を試みるが、工房の作業体制や履物の社会的意味についても考察を加える。本論文は第Ⅰ章から第Ⅶ章までの全7章から構成される。

第Ⅰ章「人類の皮革利用」では、皮革利用の起源、皮革利用と家畜化との関係を概観した後、古代の皮革利用についての研究史をまとめる。皮革製品は早くから出土例が知られていたものの、長らく研究が進展せず、資料の蓄積が進んだ1970年代以降も研究の焦点はローマ時代以降に集中する傾向にあり、古代エジプト王朝時代については履物に代表される皮革製品の研究に大きく偏ってきたことを指摘する。そうした状況の中、ナイル川中流域に位置するアコリス遺跡からは皮革製品が大量に出土し、工房址と考えられる遺構やそれに関連する遺物も数多く検出されたことで、古代エジプト王朝時代の皮革技術全般について実証的な研究が可能になったことが強調される。

第Ⅱ章「皮革技術の復元に向けた多角的アプローチ」では、まず皮革技術は鞣しを経て皮を革にする製革技術と、革を製品にする製品製作技術とに大別されることを確認し、皮と革、製革工程と製品製作工程は本来厳密に区別されるべきものであることを指摘する。次に、古代エジプト語の文字資料、高官の墓に描かれた図像資料、アコリス遺跡からの考古学的資料、古代の皮革工具など、具体的な皮革関連資料について検討を加える。文字資料の分析では、墓や神殿の壁面に刻まれた文字資料やパピルス文書を対象に、皮革に関連するヒエログリフサインについて検討する。墓の壁面に描かれた図像資料については、古王国時代から末期王朝時代までの21例について検討し、ステーキング台や皮の浸漬用の大甕をとともなう製革の作業場面が17例、サンダルやチャリオットの部品などの製品製作の場面が20例認められ、そのうち両者が同一画面上に描かれているものが

16例あることから、2つの工程は同一の工房で一連の作業としておこなわれていた可能性が高いことを指摘する。アコリス遺跡出土の皮革工房関連資料についても、大甕、獣毛、アカシア属の豆果などの製革工程に関連する遺物と、皮革製品、裁断片、工具など製品製作工程に関連する遺物が近接した場所から出土していることを指摘し、この工房が製革工房と製品製作工房の2つの性格を併せもっていたと評価する。このように、画像資料と考古学的資料の分析のいずれにおいても、製革工房（工人）と製品製作工房（工人）は明確には区別できないことが確認され、文字資料の分析でもそれに反するような結論は得られなかったことから、古代エジプト王朝時代においては、実際に製革工程と製品製作工程の分業がまだ確立しておらず、皮の加工から製品製作にまで至る一連の工程が、同一の工房で同一の工人によっておこなわれていた可能性が高いと結論付ける。

第Ⅲ章「製革工房の様相」では、古代の製革工房には水槽群を備える大規模な工房とそうでない工房とがあることを指摘し、前者を「ローマ式工房」、後者を「エジプト式工房」と名付け、それぞれの工房の特徴についてアフリカの民族事例を交えながら検討する。水槽群を備える製革工房はポンペイ遺跡などで早くから確認され、現代のモロッコでも同様の工房が主流であることから、古代における重要な鞣し法である植物タンニン鞣しは、こうした「ローマ式工房」においてのみ可能であるとされてきた。しかし、アコリス遺跡で発見された工房は水槽群を備えていないにもかかわらず、硫酸第一鉄を用いた簡易的なスポットテストの結果は、皮革製品の中に植物タンニン鞣し法によって製革された革があることを示し、現代の西アフリカでも「エジプト式工房」において植物タンニン鞣し法がおこなわれている事例があることから、水槽群を備えていない工房においても植物タンニン鞣し法による製革は可能であったと指摘する。

第Ⅳ章「王朝時代の製革技術：皮から革へ」では、作業の進行順に従って製革工程について検討し、古代エジプト王朝時代における製革工程全体の復元を試みる。中でも、植物タンニン鞣し法について詳細に検討を進め、アコリス遺跡で大量に出土しているアカシア属の豆果が現代のアフリカでも鞣し剤として盛んに利用されていることを指摘し、鞣し剤の点からもアコリス遺跡において植物タンニン鞣し法が実施されていたことが補強できるとする。これにより、植物タンニン鞣し法は紀元前1千年紀初頭にまで遡る可能性が高くなったとし、さらにアコリス遺跡の工房址と画像資料にみられる工房はともに大甕を備えるなど共通する特徴がみられることから、植物タンニン鞣し法による製革はさらに中王国時代にまで遡る可能性があると主張する。

第Ⅴ章「王朝時代の皮革製品：革から製品へ」では、古代エジプト王朝時代の皮革製品を代表する履物について、その製作技法に注目しながら分類をおこない、皮革製履物の時代的な変遷を検討する。王朝時代の皮革製サンダルはソールの踵部分から切り出された「耳」が設けられ、そこにストラップが結ばれる構造であることが特徴であり、基本的な形状にほとんど変化がみられないことを指摘する。その一方で、皮革製サンダルの細部を検討すると、新王国時代以降にはサンダルのソールが単層から多層になること、多層ソールの周縁縫合の方法がそれまでの平重ね式に加え巻き包み式のものが見られるようになること、爪先部分が長く伸びるソールや先端部が大きく反り返るソールが新王国時代から第3中間期にかけて盛行することなど、時代による違いもみられることを指摘する。また、王朝時代にみられる踝丈のブーツについても検討し、画像資料や彫像にそれを着用している人物が認められないことから、エジプト国外から将来されたものである可能性が高いとし、アコリス遺跡での出土例を根拠に、ブーツの製作と着用が定着したのは第19王朝以降であるとする。

第Ⅵ章「王朝時代の皮革製品使用と皮革業の社会的意味」では、古代エジプト王朝時代の履物には実用品だけでなく、象徴的意味が付与されたものもあることを指摘し、それぞれの社会的意味について考察する。象徴的意味をもつ履物としては、パピルス文書などに清浄や無垢の象徴として描かれる「白色サンダル」があり、中王国時代の墓に副葬されている白色に塗布された木製サンダルはその実例であるとする。墓に副葬される履物は時代を経るにつれ、金属製、植物製、皮革製のものも加わるようになり、ブーツも副葬されるようになる。これは、履物自体が清純無垢の象徴性を帯びるようになったためであるとし、辟邪の役割を担うようになった

可能性を指摘する。実用品としての履物は植物製と皮革製が考えられ、耐久性に乏しい植物製の履物は神官が神殿内で着用するものであったのに対し、皮革製の履物は補修痕や使用痕の認められる例が多いことから、日常生活で使用されたとする。新王国時代のサンダルの「価格」が記載されている文字資料についても検討し、生活必需品としてはやや高価ではあるものの、必ずしも入手不可能なものではなかったことや、地方の集落においても大量に生産・使用されている例があることから、第3中間期には履物が広く普及していたと評価する。

第VII章「皮革技術研究からの展開」では、これまでの各章の内容をまとめた後、皮革生産における工人組織と作業体制について検討する。これまで、古代エジプト王朝時代においては、手工品生産の分業化が進んでいたとされてきたが、皮革については技術的な問題もあり、分業化は進んでいなかったことを改めて確認し、最後に皮革製品に対する理化学的分析の欠如など、今後に残された課題についても言及して擱筆する。

審査の要旨

1 批評

本論文は、著者自身が長きにわたって調査に携わってきた、アクリス遺跡の皮革工房址とそこから出土した大量の皮革関連資料の分析を中心に据え、製革から製品製作へと至る古代エジプト王朝時代の皮革技術全般と皮革製品のあり方を総合的に考察した、たいへん意欲的で優れた論考である。中でも、「エジプト式工房」「ローマ式工房」という概念を設定し、水槽群をもたない工房でも植物タンニン鞣し法による製革が可能であることを示したこと、それが開始された年代についても従来の説を大きく遡る可能性があることを指摘したこと、精緻な分析によって皮革製履物の時代的変遷を詳細に跡付けたことは、どれもオリジナリティに溢れた重要な学問的成果であり、学界への寄与はきわめて大きいと評価することができる。また、著者自らが数度にわたって実施した、アフリカにおける皮革生産の民族考古学的調査は、その成果が本論文の随所に生かされており、考古学的資料だけでは解釈に限界のある部分を補い、議論の説得性を大いに高めることに成功している。

課題を挙げるとするならば、第VI章で展開されている履物の社会的意味をめぐる議論についてである。特定の履物だけでなく、履物全体が次第に清浄さを象徴する存在となっていくとの結論は、履物が墓に副葬される事例が増加することが主な論拠とされており、これについては文字資料なども含め、今後より幅広い視点からさらに検討していく必要があると思われる。

こうした課題を残してはいるものの、発掘調査から出土した膨大な基礎資料を丹念に分析し、アフリカをはじめとする現代の民族事例にも目を配りながら、古代の皮革技術について詳細に論じた本論文は労作であることは間違いなく、古代エジプト王朝時代だけにとどまらず、今後の古代皮革研究に新たな地平を切り拓くものとして高く評価することができる。

2 最終試験

平成31年3月20日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究所論文審査等実施細則」第10条(3)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。